

令和7年度 第4分科会 研究課題「組織・運営に関する課題」

研究主題 「学校の組織力向上と働き方改革の推進」

～各学校の実情に応じた校務の効率化・人材育成の取組をとおして～

西諸支会 えびの市立岡元小学校 川野 竜一

- 1 主題設定の理由
学校内外の様々な課題に適正かつ迅速に対処するためには、教職員の人材育成や学校の組織的な対応が不可欠である。
一方、教師が児童・生徒と向き合う時間を十分確保するためには、校務の効率化を図り、働き方改革を進めることが必要である。
これらの課題意識をもち研究を進めることにしたが、市内の学校はそれぞれ学校規模や職員構成等が異なり、同様のアプローチでは課題解決が難しいと考えた。
そこで、昨年度までの2ヶ年の研究を生かし、引き続き、各学校がその実情に応じて、校務の効率化や人材育成の取組を行うことで、学校の組織力向上と働き方改革の推進をさらに進めることができると考え、本主題を設定した。
- 2 研究のねらい
各学校の実情に応じて、校務の効率化や人材育成の取組を工夫することで、学校の組織力向上と働き方改革を推進する。
- 3 研究の概要と成果
各学校の取組や成果、教頭としての役割は、以下のとおりである。
 - (1) 飯野小学校
 - ① 取組とその成果
 - 授業改善に特化した研修副主任2名を校務分掌に位置付けた。また、研修テーマを「子どもが主体的に学ぶ授業」とし、各職員がイメージする子どもが主体的に学ぶ授業に迫る研修を実施した。また、学校訪問のフィードバック内容を活かして授業改善し、9～10月にチャレンジ授業（学年間）を実施した。
 - 6学年だけでなく、3～5学年においても教科担任制や交流授業（2クラスを混合）を実施し、教師の専門性を高めるとともに、授業準備を効率的に行うことができるようになった。
 - ② 教頭としての役割
 - 業務の進め方について、OJTをとおして人材育成を行った。特に、管理職に判断を求める場面が多々あったため、各部で情報収集、協議をし、部としての意見を具申するよう話をした。その際には、再度チャレンジする機会をもつようにした。
 - 教頭が学校にいる時間を明示することで、全職員が業務を見通しをもって進めるようになった。どうしてもその時間内に業務が終わらない職員には、予備の鍵を渡し、最終施錠を任せた。
 - (2) 加久藤小学校
 - ① 取組とその成果
 - 午前中5時間授業、休憩時間の分割、水曜日全学年5時間授業等、校時程の見直しや会議の効率化を行い、昨年度より児童下校後の時間にゆとりができた。これにより、水曜日にどの会議も実施できるようになった。また、水曜以外の放課後の時間は、教材研究や教育相談等に充てることのできるようになった。
 - 本校は学担のほとんどが、教職経験10年未満である。個々のニーズや課題に応じた主題研究へのシフトが可能かどうか関係職員と協議し、本年度は主題研究を個人研究に切り替えた。年度当初、それぞれ研究テーマ（課題）を設定し、年間をとおして研究・実践を行うことで授業力向上を目指した。昨年度よりも職員の取組が意欲的になった。
 - ② 教頭としての役割
 - 前年度から年間をとおして、職員の業務状況と教育活動の実施状況をチェックした。その後、次年度教育課程編成時に、課題解決の方策を校長に意見具申し、教務主任と共に職員に提案した。
 - 職員に研究テーマと教職員評価シートをリンクするよう伝えた。また、学校訪問や研究授業の事前の助言だけでなく、年間をとおしてそれぞれの実践上の悩み等を聴き、共に考えた。その他、個々の研究テーマに関連する校外研修の受講を進めた。
 - (3) 上江小中学校
 - ① 取組とその成果
 - 各種アンケートや調査、職員の提出物の回収にGoogleフォームを活用した。また、C4t hに職員会議資料等を事前送信し、紙の資料を削減することや安心安全メールで保護者配付文書を送信する等を通して、校務の効率化を図ることができた。
 - 多くの職員に初期研修者に関わってもらい「つながりづくり」と「指導法の継承」を推進することができた。
 - ② 教頭としての役割
 - 主幹教諭及び研究主任とともに本年度の主題研究の方向性を設定する過程で、教頭として助言を行った。授業改善を目指した一人一授業の事後研究会に参加し、フィードバックを行った。年度当初に、各種研修会に積極的に参加するように呼びかけた。個別に研修受講に関するアドバイスも行った。
 - 地域・学校・保護者が「共につくる上江交流フェスティバル」に発展させるために連絡調整を密に行うことができた。
 - (4) 真幸小学校
 - ① 取組とその成果
 - 本校では、校務の効率化を図る働き方改革の一環として、リフレッシュデイの設定曜日を変更するとともに、施錠の分担や会議の精選を引き続き行っている。放課後の時間を確保し、教材研究や資料作成などを行うことで、先を見通した業務を進めることができるようになってきている。
 - また、C4t hを活用して終礼での伝達を行ったり、会議資料のペーパーレス化を図ったりすることにより、資料準備の時間や会議時間を短縮することにつながってきている。

- ② 教頭としての役割
- 能力育成期や能力拡充期、また経験の浅い職員に対して、積極的なコミュニケーションを図ることに努めている。起案文書の作成や業務の進め方について助言し、担当業務への理解を深めることができた。また、進捗状況を把握し、早めの声かけを行ったことにより、ゆとりをもって企画・準備等を行うことができ、教職員の資質向上につなげることができた。

(5) 岡元小学校

① 取組とその成果

- R6の反省を踏まえ、小規模校ならではの全ての会議等を水曜日を実施できている。他の曜日は、教材研究となり、教材研究や授業準備の時間に当てられ、児童にかかわる時間を十分確保し、心に余裕をもって授業に取り組んでいる。
- 校務DXを活用し、会議等のペーパーレス化、えびの市校務支援の活用による連絡時間の短縮を行った。

② 教頭としての役割

- 白黒印刷とカラー印刷等は、印刷機種を決め、コストの削減を図った。会議や研修等は、事前に資料を配付・配信し、時間短縮を行い、効率的に進めることができた。
- マチコミメールで保護者や地域の方へのお知らせやお願いをしたことで文書等の削減を行った。

(6) 飯野中学校

① 取組とその成果

- 校務の効率化については、本年度もポータルサイトの活用で、会議の効率化が図れた。提出書類等や保護者への連絡・調査をデジタル化することで、ペーパーレス化も図れ、スムーズな処理ができている。また、給食時間を5分短縮して授業時間を8:30～15:30に変更し、2学期からフレックスタイムを導入することで働き方改革を推進した。
- 研究主任と連携を図り、「個別最適な学び」と「協働的な学習」に関して、各学年1人の集中授業と1人1授業を実践し、相互に授業参観を行うことで全職員の指導力向上を図っている。

② 教頭としての役割

- 教務主任と連携して、校務部会と企画委員会、職員会議の実施方法や回数を見直すことで、会議の精選や効率化を図った。また、フレックスタイムの調整や振休、年休の取得推進を促すことで働き方改革を推進した。
- 生徒指導や不登校生徒への対応など、各学年主任や分掌部長と連携して、役割分担を明確にして対応することで、組織力の向上も図れている。また、初期研の指導教員とも連携を図り、教職経験の浅い職員の研修の充実も図った。

(7) 加久藤中学校

① 取組とその成果

- 校務の効率化を目指し、本年度より企画会と職員会はペーパーレスで行っている。教務主任が共有フォルダを作り、

そこに連絡や検討事案を入れ、会議の時に活用している。その結果、資料の紛失がなくなり、会議をスムーズに行うことができた。

- 人材育成については、本年度から各分掌部の主任をサポートする「副教務主任」「副生徒指導主事」を配置している。これにより仕事を覚えることができ、主任の仕事も軽減させることができた。また、異動があった際に、次の主任を任せられるというメリットもある。

② 教頭としての役割

- 会議の資料チェックをこまめに行い、気になった箇所を事前に担当者に聞き、必要であれば助言を行い、より分かりやすい資料に修正させた。また、事務と協力し、毎月のコピー紙の使用枚数をチェックし、無駄な紙の発注を抑えるようにした。
- 教務・生徒指導関係は、業務量が多いため、これまでの経験を生かしこまめに助言を行い、更に仕事の軽減と効率化を図った。今後、それぞれの校務分掌の中で、担当業務を分担できるように努力していきたい。

(8) 真幸中学校

① 取組とその成果

- 校務の効率化については、ICTを活用し、ペーパーレスを始め、データを共有することで、事務処理時間の減少につなげることができた。また諸事例の報告の回数を減らすために、校長を含めた報告の場とすることで、時間短縮につなげることができた。
- 人材育成の取組については、校外研修の機会を与えることで、個々の力量の向上を図ることができた。またOJT機能を活かし若手の職員へのアドバイスの機会を促すことで、力量の向上へつなげることができた。

② 教頭としての役割

- 各職員の職務遂行の状況を把握しながら、必要に応じて職員間の橋渡しをしたり、支援・指導をしたりすることで、共通理解を深め組織力の向上を図ることができた。
- 校舎施錠の事前予告やリフレッシュディの活用などにより時間内勤務を充実させ、早めの退庁を促すことで、働き方改革を推進することができた。

4 今後の課題

- 校務の効率化
各学校で様々な実践が行われ、業務の効率化が進んでいる。各学校の取組を参考にしながら、各学校の校務の効率化をさらに進めていく。
- 人材育成
学校経営ビジョンの具現化を図るために教頭は、校内で授業参観や職員の悩みなどに傾聴し、人材育成を進めるコーディネーターである。日頃から対話や観察をとおして、アドバイスや指導を行う。また、校内研究をはじめ業務を推進するにあたって、教頭として、OJTが機能するよう、常に情報収集や連絡調整・指導助言をする必要がある。